

カリタス女子中学校 第三回入学試験

二〇一七年二月四日 実施

国語問題

(五〇分)

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点をふくむこととします。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

生物の色彩の意味については、ほとんど何もわかっていないといつてよい。また、ヒトから見て派手できらびやかな生物でも、それはあくまでヒトの視点であつて、自然のなかで目立つ存在であるかどうかはわからない。

そういった誤解の代表は熱帯の美しいタマムシ科や大型のコガネムシ科※の甲虫※である。これらの甲虫は強い金属光沢こうたくを持ち、たしかにわれわれの目にはきらびやかに見える。しかしそれらの生息地で、強烈な日差しきょうれつのもと、ツヤツヤとした木の葉に止まっているのを観察すると、実に目立たない色であることがわかる。

すべての金属光沢を持つ昆虫が、A そうであるわけではなく、本来の生息地で観察しないと確かなこと（それも想像の域を出ないが）はいえないが、ヒトの目だけで判断してはいけない事象の好例である。

ただし、話はそんなに単純ではなく、一部のタマムシは明らかに現地でも目立つ色彩をしている。タマムシのなかには臭い匂くさいにおいを出すものが多く、そのようなものは鳥などの捕食者※に対して、自分が臭いことを誇示※しているのだろう。そのような色彩を「警告色」という。

さらにややこしいのは、両者の中間的なものもいることである。おそらく複数種の鳥などの捕食者のいる環境で、ある場合には（ある捕食者に対しては）目立たない効果を持ち、ある場合には警告的な役割を持つのであろう。そのような色彩は、まさに「玉虫色」の意味を持つのではないかと想像している。

〈 中 略 〉

ヒトの目で赤や青で区別できる生物も、実はその色彩の違いにはほとんど意味がないということもあるかもしれない。

【 1 】 八重山諸島やえやま（西表島いひのあしと石垣島いしがき）には、オオヒゲブトハナムグリという金属光沢のコガネムシが生息しているが、個体ごとに赤や金、緑、青と色彩の変異が激しい。日本本土に生息し、シカなどの糞ふんを食べるオオセンチコガネという同じく金属光沢のコガネムシも、地域によって、赤、緑、青と変異がある。

これらの昆虫を見ていると、B そんなことを考えさせられる。

ヒトの判断にはあまり意味がなく、ヒトと同じ色彩感覚を別の生物が持つとは限らないとはいえ、美しいチョウを見ているとどうしてもその意味について考えてしまう。

チョウは①ミチゾいや草原などの広い空間を飛んでいるものが多く、野外では明らかに目立つ。野性的な能力の衰えたヒトにさえ目立つて見えるのだから、鳥などの野生の捕食者にはもっと目立つに違いない。

チョウの色彩の意味については、当然、昔からいろいろな研究者が想像をめぐらしてきた。【2】、大部分は不明であり、状況証拠から明らかなくつかの事実があるのみである。

たとえば、マダラチョウ類というタテハチョウ科のチョウのなかまは全般に、幼虫時代に毒のある植物を食べ、その毒を成虫の体のために込む。ほかにも体内に毒を持っていたり、鳥などの捕食者が食べて不味い成分を持っているチョウは多い。そういうものについては、目立つ色彩は明らかに捕食者への警告色といえる。

また、雌が明らかに地味で、雄が派手な色彩を持つことがあり、そういう場合にもいくつかの憶測が可能である。

たとえば、「②サンランに専念する雌は捕食者から免れるために目立たないようにしている」、「雄は同種の雄同士でなわばり争いをするために、互いに認識しやすいように目立つ色彩をしている」、「毒を持っており、雌を探して移動する際、目立つところに出るために、警告する必要がある」、「雌によって派手な色彩の雄が選ばれてきた結果である」などである。

毒のあるチョウの警告色などは状況証拠からしてほとんど確実だが、「憶測」と述べたように、いずれにしてもこれらのことをしっかりと証明するのは難しい。厳密には推定される捕食者を用いて捕食の実験をしなければならぬが、その実験条件ではたして捕食者が自然な行動をとるかどうかわからないし、想定される複数の捕食者を揃えるのは不可能に近い。

生物種が非常に多い熱帯で昆虫を観察していると、昆虫と捕食者の関係があまりにも複雑で、考えれば考えるほどわからなくなり、過去に著された色彩に関する研究も、もちろんその努力に敬意を払うべきではあるけれど、訝しく思えることがある。

私にとって昆虫の色彩は、多くの場合、その意味を完全に理解するのは不可能で、もはや妄想する楽しみに意義がある事象となっている。音楽に③絵画、工業製品など、ヒトのつくり出すものに真に④ドクソウテキなものほとんど存在しないといわれている。ヒトの言動はもちろんのことである。いずれも過去に存在したものの焼き直しであり、大なり小なり模倣である。

C 実はヒト以外の生物も模倣する。まねすべきものがあれば、必ずといってよいほどまねされる。しかし、ヒトが「これをまねよう」と思っただけをまねるように、個体が見て変化をするということはない。

そう思ったに違いないと信じてしまうくらいに、よくできていることもあるが、ヒトのまねと異なるのは、それが生物個体の意思による

ものではなく、突然変異と自然選択の膨大な積み重ねによる進化の結果という点である。

このように、生物が何か別のものに姿や声、匂いなどを似せることを「擬態」という。擬態は生物によるものまねの最たるもので、実は昆虫のかんりのものは、なんらかの擬態をしているといつてよい。

擬態と思われるものが本当に擬態であるかを含め、昆虫の色彩や形の意味を突き止めるのは難しいが、「隠蔽擬態」だけはわかりやすい事例である。

隠蔽擬態とは、Dである。いわば、忍者の「隠れ身の術」である。

一番身近な例は、植物の葉に姿を似せるバッタ目のバッタやキリギリスのなかまでであろう。また、木の枝そっくりなナナフシ目のなかまも有名な擬態昆虫である。このような虫は本当に見つけるのが難しく、動かないとわからないことがほとんどである。

これらの昆虫のなかまはたいいなんらかの植物への擬態をしており、ナナフシの一種であるコノハムシは葉っぱそのものといつていいくらいに巧妙に擬態しているし、東南アジアや南米のキリギリスでは葉っぱそっくりのものや、地衣類やコケそっくりのものもいる。

【3】、植物に似せるだけではない。日本の河川敷や海岸に住むカワラバッタやヤマトマダラバッタは、地面そっくりの色や模様をしているし、アフリカの乾燥地帯に生息するバッタの一種は、小石のような姿で、石そのものに姿を似せている。

日本の昆虫だけでも、地衣類のなかにひそむコマダラウスバカゲロウというアミメカゲロウ目のウスバカゲロウ科の幼虫や、木の樹皮にそっくりなキノカワガというコブガ科のガなど、巧妙な擬態をするものは数え切れない。

〈丸山宗利著『昆虫はすごい』（光文社新書）より。一部改変〉

〔語注〕

※ 科……………生物分類上の階級。

※ 甲虫……………カブトムシ、コガネムシのようにかたい前ばねではねと体を保護する虫。

※ 捕食者……………その生物にとって自分を捕まえて食べる者。

※ 誇示……………誇らしげに見せびらかすこと。

※ 状況証拠……………その時の様子によって推定した証拠。

※ なわばり …………… 生物がその生活を守るために他者の進入を許さない区域。

※ 訝しく …………… 疑わしく

※ 目 …………… 生物分類上の階級。

※ 地衣類 …………… 菌類と藻類が共生して一体化した植物群。

問一 ① ミチヅイ ② サンラン ③ 絵画 ④ ドクソウウテキ のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 「1」～「3」にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア たとえば イ ただし ウ また エ しかし オ つまり

問三 A そうである とはどのようなことを指していますか。三十字以内で説明しなさい。

問四 B そんなこと とはどのようなことを指していますか。その答えとなる本文中の一文の最初の七字をぬき出して書きなさい。

問五 C 実はヒト以外の生物も模倣する。 とありますが、「ヒトのまね」と「ヒト以外の生物のまね」はどのように違いますか。説明しなさい。

問六

□□□□にあてはまるものとして、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 別の昆虫に姿を似せて、捕食者の目をくらますこと
- イ 別の自然物に姿を似せて、捕食者の目をくらますこと
- ウ 過去に存在した物に姿を似せて、捕食者の目をくらますこと
- エ 様々な植物に姿を似せて、捕食者への警告色とすること
- オ 色彩の美しいものに姿を似せて、捕食者への警告色とすること

問七

次のア～カの中で、本文の内容に合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過去に様々な研究はあるものの、昆虫の色彩の意味を完全に理解することは不可能である。
- イ 色彩の美しい昆虫は、八重山諸島やアフリカなど熱帯の地域にのみ存在する。
- ウ 昆虫の色彩は生息地で目立つものと目立たないものの区別が必ずはっきりしている。
- エ どのような色彩感覚の生物にも、チョウの色彩は目立つようにできている。
- オ 生息地と同じ環境で実験をくり返せば、昆虫の擬態の意味を確実に理解することができる。
- カ 昆虫の多くのものは、何らかの擬態をしていると言っても過言ではない。

問八

次の①～③は「虫」を含むことわざ・慣用句です。下の意味になるように、それぞれの□□□□にふさわしい語を漢字で書きなさい。

- ① 一寸の虫にも□□□□の魂たましい どんなに小さく弱いものでも、それなりに考えや意地があるから、ばかにできないということ。
- ② □□□□の虫がおさまらない □□□□の虫がさまならない しゃくにさわってどうにもがまんならないこと。
- ③ 虫の□□□□ □□□□ 今にも死にそうなようす。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

千波は広島県の因島で母のぶ子と父作治、飼い犬のクーちゃんと暮らしている。

※とじ
里子をむかえるという話が始めてのぶ子の口からでたとき、

「おいおい、だいじょうぶか」

と作治は不安がった。

それをのぶ子は、

「人の手を必要としとる子がここにおつて、できる人間がここにおる。なのに、ためらう理由がどこにある？」

とじつにシンプルな理屈でおしきった。シンプルな理屈は力を持つ。そのことを千波は思い知らされた。

大地は後数カ月で三歳というときに、はじめて千波たちの家にやってきた。里子幹旋センターの職員のかげにかくれるように玄関に立つた大地をはじめて見たとき、思わず千波は声をあげた。

「うわー、かわいい」

ひとりっ子の千波は、ずっと妹か弟がほしかった。だから単純に、こんなかわいい子が弟になるんだと、うれしかったのだ。A 緊張し

ているのか、はずかしいのか、大地は細い腕でしきりにサイズのあわないトレーナーのすそをくるくる巻きあげていた。

「こんにちは！」

あなたの弟になるんだからね、最初が肝心よ、感じよくねと、口が【1】なるほど、のぶ子からいわれていた千波は、満面の笑みで明るく声をかけた。それなのに大地は、千波のほうは見もしないで、巻きあげたトレーナーのすそをチューチュー音立ててすいはじめた。むきだしのおなかに寒いほが浮いていた。顔色も心持ち青かった。そのときはじめて、千波の胸を黒い雲のような不安がよぎった。

——やっつけていけるの？

こんな小さな子が知らない家につれてこられて、今日から家族だよといわれて、ほんとうにだいじょうぶなんだろうか。もし自分だった

ら、全然だいたいようぶじゃない。きつとパニックになる。それに、なれ親しんだ親子三人の生活に他人がはいりこむことにも抵抗ていこうがあった。なにかとんでもないことが起こりそうな予感に、千波の腕うでにも鳥肌とりはだが立った。

センターのひとに頭をおさえられて、ようやく大地は「2」の鳴くような声で、

「こんにちは」

といった。それだけで朝からの緊張と興奮がピークに達していたのぶ子は涙ぐんだ。そして、

「いらっしやい、大地くん。今日からここがあんたの家だからね」

「よおきたのお」

と作治とふたりしてだきかかえるように、リビングにつれていった。大地はカクカクとまるでロボットみたいな歩き方でついていった。

そんな予行演習のような日々を何度かかさねて、大地は正式に千波の家に来てきた。荷物は背中にしよった小さなリュックひとつだった。た。

その日から、三人とクーちゃんちゃんの静かな生活は一変した。まず家中の障子①に穴があいた。よっぽど障子がめずらしかったのか、大地が片っぱしから指を突つつこんでまわったのだ。

千波はわきあがる不安を無理やりおさえこんで自分にいい聞かせた。弟なんだ、かわいがってやろう、いいお姉ちゃんねえになろう。

ところが、大地には顔に似あわず、かわいげのないところがあつて、のぶ子のまえではおとなしくしているのに、千波とふたりきりになると微妙びみょうに態度が変わった。散らかしたおもちゃを「片づけようね」というと、無言でいらむ。無理やりいうことを聞かせようとすると、まるでダンゴムシみたいにからだをまるめて、つばをはきかけられた。それに、いくらいつても姉ちゃんとは呼ばず、千波と呼びすてにした。

最悪さいあくだったのは、千波が学校にいつているあいだに勝手に千波の部屋へやにはいりこんでいたずらすることだ。幼いころから大切にしている絵本にぐちゃぐちゃに落書きされたときには、千波はマジギレした。縁ふちがすりきれてまるくなるまで楽しんだ、まるで自分のような絵本の数々。これらの絵本によって千波は本の世界への扉かどをひらかれたのだ。

それなのに、涙ながらにうったえる千波にのぶ子は、

「大地はまだこまこまいんじゃけえ、ゆるしちやり」

とつかれた顔をむけるだけだった。また当初、毎晩夜泣きをする大地につきあつて、のぶ子は睡眠不足がつづいていた。そのとき千波は、はじめて大地を憎いと思った。そしてそれは、持つてはならない感情だった。やり場のない怒りをもてあました千波は、ベッドのふとんに頭を突っこんで号泣した。大地なんかいらん。帰れ、帰れ。

ある日の午後、千波の家の離れが火事になり、大地をかばった母のぶ子が負傷して病院に運ばれる。千波は、以前、家出をしたいという友人といっしょに離れにローソクを持ち込んでいた。千波は大地を連れて家に帰る。その夜、二人は近所の家に泊まることになる。

「ふうー」

千波は肩で大きく息をついた。消防車のサイレンを聞いたときから、ずっと息をとめていた気がする。

「姉ちゃん」

えっ？ ^C 聞きちがいかと思った。

「姉ちゃん」

もう一度呼ばれてふり返った。大地が道の真ん中にすわりこんでいた。

「なに？ あぶないが」

「おんぶ」

「まじー？」

口とは裏腹に、すつと背をむけ、しゃがみこんでいた。

「おいで」

今日は大地にとつても、大変な一日だった。きつと、すごくこわかったにちがいない。

背負うと、大地は意外なほどの軽さだった。ささえる手のひらに、尾てい骨があたる。十五、六キロ？ 千波の三分の一以下だ。背中に

じんわり大地の体温が染みてきた。こんなに軽いからだ。毎日憎まれ口をたたいたり、わけのわからない行動でのぶ子や千波をなやませたりしていたのか。そう考えるとしみじみ大地がいとおしくなった。ずり落ちそうになったおしりをゆすりあげると、

「ねむたーい」

あまえ声の大地が、千波の肩に頭をあずけてきた。首筋にかかる息がくすぐったい。大地がこんなに②ムボウビに千波にからだをゆだねてくるのは、はじめてだ。胸がキュンとなった。その一方で、ぬぐいきれない黒い疑いが千波の背中をかたくする。火事の原因をつくったのは自分だ。だけど、火をつけたのは大地じゃないのか？

家が近づくにつれ、こげくさいにおいが鼻をついた。どうなってるだろう、家。見るのがこわい。胃が③シユウシユクしてはきそうになった。背中 of 大地のからだも、かたくこわばっている。

月明かりに照らされた冠木門※かぶきもんのまえに立った。昼間と同じく、門はあけ放たれていた。塀へいも地面も放水でびしょびしょだった。冷静に冷静にと自分にいい聞かせながら、被害ひがいを確認する。焼けこげた庭木の奥おく、離れの屋根がまるく焼け落ちていた。だけど作治のいったとおり、母屋※おもやはほとんど無傷だった。よし、これならだいじょうぶ。大地をおろし、ふたりして冠木門をくぐった。そのときだった。

ヒヤイン、ヒンヒン

庭の奥から、まるでほ※ふく前進みたいな格好で、クーちゃんはいだしてきた。

「クーちゃんじゃー！」

「クーちゃん、クーちゃん。無事じゃったんじゃねえ」

半分になった鎖くさりを引きずったまま、クーちゃんはどうかやってよろこびをあらわせばいいのかわからないといった様子で、はしゃぎまわった。背中に乗ってみたり、おなかを上にごロンとひっくり返ったり。

「クーちゃん、クーちゃん」

大地は自分もいっしょにころがって、ぬれた地面でズボンをぬらした。クーちゃんは鼻にしわを寄せ、歯をむきだして笑っていた。

「あつ、背中がこげとる！」

見ると、クーちゃんのおしりから背中にかけての毛が、こげてちりちりになっていた。しっぽもみじかくちぢれている。

「消防のひとが放してくれなかったら、焼け死んどったかもしれない！」

クーちゃんのふるえるからだをだき寄せたとたん、千波の心のたががはずれた。[※]「3」になって大地をどなりつけた。

「あんたじゃろ？ あんたが火をつけたんじゃー！」

大地は目に見えてふるえだし、視線をうろうると庭の暗がりにはわせた。さつきから自分を責めつづけていた反動のように、残酷な^{ざんこく}気持ち^{きもち}がわきあがり、言葉がとまらなくなった。

「お母^{かあ}さんじゃって、もしかしたら死んどったかもしれんよ！ そうなったら、あんたのせいじゃー！」

「ぼ、ぼく、あのな」

はじかれたように大地は立ちあがった。くちびるが、ふるふるふるえている。千波は、ごくつとつばを飲みこんだ。

「口、ロウソクで遊んどったんじゃ。ほしたら、ロウソクがたおれて、ほんでな、ほんでな、やぶれたカーテンがひらーとなって、ほんでな、ほんでな、……えっ、えっ、えっ、えっ」

息が止まったのか、大地はのどを突きだし、苦しそうにあえいだ。

—— D やっぱり。

クーちゃんがどうしていいかわからないといった様子で、大地のまわりをくるくるまわった。

「E ぼくは、もどされる。ぼくは、もどされるんじやー」

とうとう大地は空にむかって、ほえるように泣きだした。しまった！ 千波はくちびるをきつくかみしめた。大地をここまで追いつめちゃいけないかったのに。こんなこと、いわせちゃいけないかったのに。どうしていいかわからず、千波は夢中でパニックになって泣き叫ぶ^{なげ}大地をだきしめた。

「大地、ゴメン。落ち着き！ だいじょうぶ。だれもあんたをもどしたりせんよ！」

なおも千波の腕の中でばたばた暴れながら、大地はくり返した。

「もどされるー。悪い子は、もどされるんじやー」

大地のおそれが、からだ中から伝わってきた。千波のからだを電流が走る。ごめん、大地、ごめん。大地をだく腕にまします力をこめながら、千波は心の中であやまりつづけた。うちは、ひどいお姉ちゃんじゃ。全部あんたのせいにしてしようとした。それに、うち、あんたをもどせばいいと思ったこと、なんべんもあった。

からだはつかれきつているのに、目がさえて眠れない。月の光のさしこむうす暗がりの中で、千波はいつまでも見られない部屋の見えない天井を、まばたきもせず見つめていた。ミイラのように包帯を巻かれたのぶ子の姿と、

(ぼくは、もどされる。ぼくは、もどされる)

大地の哀切な叫びとが、心をしめつける。苦しかった。いまこそ、のぶ子にそばにいてほしかった。

——お母さん、お母さん、お母さん。

何度も口をあけ、声にならない声で呼びつづけた。

——お母さん、死んじやいやだ。

そのとき大地の寝言が聞こえた。

「お母さん」

千波はからだをすべらせ、そつと大地のふとんにもぐりこんだ。顔を寄せると、うすくあいた口から、ほのかにあまい息がかかる。アトピーであれてがさがさの手の甲をなでていると、大地がいとおしくてたまらなくなった。と同時に、大きな悲しみにおそわれた。いとしいと悲しいは、ひとつの言葉なのかもしれない。大地をいとしく思えば思うほど、悲しみの感情がわきあがる。千波のほおを涙がすべり落ちた。大地は広い草原に立つ一本の苗木のようにだ。細くてたよりない。だけど風にゆらぎながらも、必死にわが家という土壌の上で根をはろうとがんばっている。

時を重ねるごとに、ひとつずつあなたを知っていつて

さらに時を重ねて、ひとつずつわからなくなつて

※ 『サウダージ』の一節が胸の中でリフレインした。それでいいのだ、きつと。そうやって大地との時間をかさねていけばいい。わからないからこそ、わかった瞬間のよろこびは大きいのだ。今日千波は、**F** 大地の心の声を聞いたと思った。それは胸をえぐられると同時に、大きなよろこびもたらしてくれた。

大地を憎む気にはどうしてもなれなかった。

〔語注〕

- ※ 里子^{さとこ}……………他人に預けて養ってもらう子。
- ※ 里子^{あつせん}幹旋センター……………里子を里親（養い親）に紹介^{しょうかい}し、新しい親子を結びつける施設^{しせつ}。
- ※ 寒い^{あつ}ぼが浮く……………鳥肌^{とりはだ}がたつこと。
- ※ こま^ないんじゃけえ、ゆるしちやり……………《方言》小さいんだから、ゆるしてあげなさい
- ※ 離れ……………母屋とは別に建てた家。
- ※ 冠木門^{かぶきもん}……………門の一種。
- ※ 母屋^{おもや}……………家の建物の中で中心になる部分。
- ※ ほ^なふく前進……………腹ばいになって前に進むこと。
- ※ た^なががはずれた……………緊張や制限がとれ、しまりのない状態になったこと。
- ※ 哀切^{あいせつ}……………非常にあわれでもの悲しいこと。
- ※ 『サウダージ』……………因島出身の二人組ロックバンド ポルノグラフィティの楽曲。
- ※ リフレインした……………くり返された。

問一

① 障子

② ムボウビ

③ シユウシユク

の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二

本文中の【1】～【3】にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のそれぞれのア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----------------|---|---------------------|---|----------------|---|----------------------|---|---------------------|
| 【1】 | ア | すつぱく | イ | しよつぱく | ウ | にがく | エ | からく | オ | あまく |
| 【2】 | ア | 猫 ^{ねこ} | イ | 赤ん坊 ^{あかぼう} | ウ | 蚊 ^か | エ | 風 | オ | すずめ |
| 【3】 | ア | ひとり立ち | イ | 棒立ち | ウ | 一本立ち | エ | 爪先立ち ^{つまさき} | オ | 仁王立ち ^{におう} |

問三 A 緊張きんぱうしているのか、はずかしいのか、大地は細い腕うででしきりにサイズのあわないトレーナーのすそをくるくる巻きあげていた。とありますが、その他に「大地」の緊張やはずかしさが表れている行動を本文中より二カ所ぬき出しなさい。

問四 B 本の世界への扉とびらをひらかれた とありますがどういいうことですか。わかりやすく言いかえなさい。

問五 C 聞きがちがいかと思った。 とありますが、「千波」がそう思ったのはなぜですか。その理由を答えなさい。

問六 D やっぱり。 とありますが、このあとにどのようなことばが続くと考えられますか。答えなさい。

問七 E ぼくは、もどされる。 とありますが、どこにもどされると言うのですか。答えなさい。

問八 「千波」が聞いた「千波」の心によろこびをもたらした F 大地の心の声 とはどのような内容なのか述べなさい。